HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	昭和戦前-戦後初期の＜国体＞と＜デモクラシー＞ : 日本国憲法との連続性に着目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	大谷, 伸治
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12064号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61663
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Shinji_Ohtani_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　大　谷　伸　治

審査委員　主査　准教授　川　口　暁　弘
副査　准教授　谷　本　晃　久
副査　教　授　権　　錫　永

学位論文題名
昭和戦前～戦後初期の〈国体〉と〈デモクラシー〉―日本国憲法との連続性に着目して―

本論文は、昭和戦前・戦中期の政治学者・矢部貞治（東京帝国大学法学部教授）のデモクラシー（衆民政）論・国体論を中心に、同時期の憲法学者・政治学者（里見岸雄、大串兎代夫、藤澤親雄、南原繁）との比較を交えつつ、戦後民主主義との連続性について分析・考察するものである。政府寄りの立場の者たちによる昭和戦中期の共同体的衆民政論が戦後の協同民主主義に直結することを論証して、民間の政府批判者による自由民権運動・大正デモクラシー運動が戦後民主主義に復活したとの昭和政治思想史の枠組みを修正する。

本論文が有する上記の特質を踏まえて、大学院文学研究科日本史学講座で明治憲法史を専門とする川口暁弘准教授を主査とし、副査には、日本史学講座准教授・谷本晃久（日本近世史）と、歴史文化論講座教授で日本近代思想を専門とする権錫永を配し、上記三名の審査委員をもって審査委員会を構成した。審査委員会は平成２７年１２月１８日に発足し、同日第１回審査委員会を開き論文の配付と審査日程の調整を行った。平成２８年１月１８日に開催した第２回審査委員会では、論文内容の検討と問題点の整理を行った。同年１月２３日、口頭試問を実施した。約二時間にわたり質疑応答を行った。同日、第３回審査委員会を開き、口頭試問の内容検討と評価、学位授与の判定を行った。その結果、審査委員会では学位授与を妥当と判断し審査結果報告書（案）の作成作業に移行した。審査結果報告書（案）は主査川口が作成し、第４回審査委員会（１月２４日～２月１日）で回覧の上適宜字句の修正加筆を行った。その結果、２月２日第５回審査委員会で審査結果報告書を確定した。こえて２月２２日開催の大学院文学研究科教授会に於いて審査結果の報告を行い、可否投票の結果、学位授与を妥当とする判断が下された。

本論文は、矢部貞治をはじめとする当時の論者たちが、翼の左右を問わず、現在の私達が相反するものと考えるデモクラシーと国体を相互補完の関係として論じていたこと、その結果、伝統社会への単純な回帰ではなく、西欧的な自由民主主義でもない、第三の道である共同体的衆民政を異口同音に唱えていたこと、これが戦後の協同民主主義に直接つらなるものであること、を論証した。この考察によって、戦前と戦後は、国体論によってデモクラシーが圧殺されていた前者と国体論を廃棄することでデモクラシーを謳歌する後者とからなる断絶の関係ではなく、共同体的衆民政論を媒介項として連続する関係に再定義される。以上、本論文は従来の日本政治思想史の枠組みに訂正を迫る成果を有するものと評価できる。

だが、次の諸点が問題点として指摘されたことも明記する必要がある。第一に共同体的衆民政論の動機である「近代の危機」は、客観的危機か矢部の懐疑か、現状批判か近代主義批判か、不明確である。第二に共同体的衆民政論で一致する論者たちが、政治の世界で敵対する理由が不明確である。第三に政治的連続性と思想的連続性の区別がやや曖昧である。最後に、戦後ある時期まで政治的影響力を有した協同民主主義の衰退と忘却について、その理由の解明は今後の課題として残された。ただし以上の問題点は、本論文の学問的価値を更に高めるために提示されたものであり、本論文の価値を損なうものではない。